

宣教と神学：ユダヤ人伝道の神学的位置づけ

2006年度 Spring

四月二十四日

目次：

| | |
|-------------------------|---|
| 宣教と神学の深い出会い | 1 |
| ユダヤ人伝道－教会の召命－ | 1 |
| 重要教理と些細な教えの扱い | 2 |
| 歴史的千年王国説と… | 2 |
| 漸進的ディスペンセーション主義の千年王国説と… | 2 |
| 後千年王国説と… | 3 |
| 無千年王国説と… | 3 |
| パネル・ディスカッション | 3 |
| 当日の最新プログラム | 4 |

【お願い】

当日の昼食は、受付にて弁当の注文を受け付ける予定です。ただ、今回の研究会はかなり大人数になることが予想されています。弁当屋さんにある程度の数の予約注文をいれる必要もありますので、参加希望者は下記の「安黒」まで出席者の名前と弁当の予約注文の有無をお知らせください。

Tel. 090-5064-7313 (あぐろ)

教会と宣教とが漸進的に深く神学との出会いを

例年通り、クリスマス行事を終え、年も押し迫った2005年12月29日、日本福音主義神学会西部部会の理事会が開催されました。そして2006年の「春期研究会議」の相談がなされ、コーディネーターが数名選出されました。今回のテーマは「宣教」を重視する特長をもつ関西聖書学院で開催されることもあり、「宣教」という視点が提案されました。ただ、神学会は宣教大会とは異なり、宣教を考える上においても「神学」との関わりが考慮されなければその存在意義を失うことにもなります。

というわけで、「宣教と神学」という大枠が決定されました。このときに話し合いの基盤となりましたのは、「教会と宣教とが漸進的に深く神学との出会いを経験してきた」歴史的脈絡において開催されましたローザンヌ世界伝道会議とその結実としての「ローザンヌ誓約」でありました。福音派における宣教の「マグナ・カルタ(大憲章)」と言われています誓約です。最初はこの



今回の研究会の会場：関西聖書学院の正門

「ローザンヌ誓約」とその後の継続研究会議を含めてのローザンヌ運動の動向等を包括的に取り扱う内容の主題講演を、ローザンヌ会議の講師であり、また『ローザンヌ誓約－解説と注釈－』の翻訳者、論文集『ポスト・ローザンヌ』の編集者である宇田進先生に打診しましたが、健康に少し不安を抱えておられていましたので、話し合いを振り出しに戻し、検討をしました。

『ユダヤ人伝道－教会への召命－』

宣教と神学」というテーマでは、大きすぎますので、各論として何に焦点をあてるかが議論となり、「世界宣教のためのローザンヌ委員会」において『ユダヤ人伝道－教会への召命－』(ローザンヌ宣教シリーズ No.60)が翻訳されることと、「宣教と神学」というテーマとして聖書解釈、終末論、千年王国説等の議論とかみあわ

せて、このテーマを扱うことは神学会としてふさわしいことではないかということになりました。

関西には福音主義神学会に属する多様な教派の神学校があり、それは神さまの大きな祝福を構成しています。ある神学者は福音派は「一枚のモザイクの絵」のようであると言っています。福音派は、「聖書は神の靈感によつ

重要“Crucial”な教理と些細“Trivial”な教えの扱い

て書かれた誤りのない神のことばである。」という点において一致しており、教理的にも主要な「幹」となる教理の大半において一致しています。ただ、「枝葉」となる部分での聖書解釈においては多様性がみられます。

今回のテーマと深い関係のある「終末論」においても「時間上の死、中間状態、再臨、からだの復活、最後の審判」という重要“Crucial”な教理について一致しています。しかし、「千年王国の理解、再臨についての理解（二重再臨か、単一の再臨か、大患難の前なのか、後なのか等々）」の些細（trivial）な教えにおいては聖書解釈の相違があります。

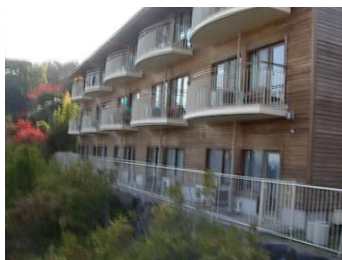
福音派の研究会議では、相違点をできるだけ扱わないで、一致点に比重を置いて取

り組もうとする空気があるわけですが、今回は「相違点を明らかにしつつ一致点“Unity in Diversities among Evangelicals”」を探索する機会になればと考えています。

今回は、長年それぞれの神学校で「組織神学」の科目を教えてこられた先生方が語ってくださいますので、このテーマに関しては所属教派の教えのみならず、他教派の教えにも通じておられる先生方ですから、充実した中身と建設的な方向性を意識した議論が期待できると考えています。

発題と集会は、インターネットで同時中継され、後日ホームページ上にビデオ・ファイル掲載されます。また、希望者にはDVDによる提供もなされる予定です。

（コーディネーター長：安黒）



スタッフ・神学生の寮

1. 歴史的な前千年王国説とユダヤ人伝道の神学的位置づけ

関西聖書学院：安黒務

元々は、ディスペンセーション的な見方を教えられてきて、よく分からないまま受け入れてきましたが、エリクソン著『キリスト教神学』を翻訳させていただき、それをテキストとして「終末論」を何度か講義しているうちに、わたしはエリクソンの理解の方がよりすぐれた聖書理解であり、よりすぐれた聖書解釈であると思うようになりました。そして、エリク

ソンの理解の基盤にG.E.ラッドやJ.マーレーやG.ヴォスの聖書解釈があることも知りました。今回はそのあたりを紹介していきたいと思います。(1)「旧約聖書の預言的箇所」の聖書解釈の原則の検討(ジョージ・E・ラッドより)、(2)「ローマ9, 10, 11章の解釈」からのイスラエルの神学的位置づけ(ジョン・マーレーより)、(3)より困難の少ない見方としての「歴史的な前千年王国説」(ミラード・J・エリクソンより)

関西には福音主義神学会に属する多様な教派の神学校があり、それは神さまの大きな祝福を構成しています。

2. 漸進的ディスペンセーション主義の前千年王国説とユダヤ人伝道の神学的位置づけ

福音聖書神学校：眞鍋孝

序論：福音主義神学者として、私たちは多くの点で一致している。共有する聖書解釈原理に立ち、真理の体系化を図っているからである。しかし、終末論に関しては、立場の大きな相違が存在している。何故か、今までの福音主義神学の研鑽の中で、一つの領域がクローズアップされてきた。それは、旧約のキリスト再臨、イスラエルの回復、救

いの完成に関する預言部分の解釈が福音主義者間で鋭く対立しているという事実である。この問題と取り組む必要がある。この面におけるプログレッシブ・ディスペンセーション主義の聖書解釈の一貫性を紹介したい。

(1)キリスト再臨預言は、キリスト初臨の預言(旧約)と成就(新約)に見る解釈原理で解釈して終末論を構築すべきである。2～3の具体例を述べる。(2)上の議論で確認し

た解釈原理で聖書全体の終末に関する預言部分を解釈して神の救済史に図表化すれば、以下になる。図表の提示。(3)時間の許される範囲内で、イエス・キリストの終末講話；I、IIテサロニケ；ダニエル等の聖書記事を検証する。

結論：福音主義者として今後とも互いにみことばの研鑽に励み、終末論、また、イスラエルの回復についても聖書の啓示事実と合致する理解に到達したい。

3. 後千年王国説とユダヤ人伝道の神学的位置づけ

神戸神学館: 滝浦滋

現在の準備の段階での要点にすぎませんがとりあえずお送りします。

1) 聖書の骨格としての「契約」(特にアブラハム契約の第三点)、2) 聖書啓示の進展を「王権と王国」について見る、3) 「神の王国」のキリスト初臨後の「現実性」「地上性」と特質、4) 千年王国預言とピューリタンらの希望、5) 近代福音主義の現実逃避傾向の克服としてのポストミレ



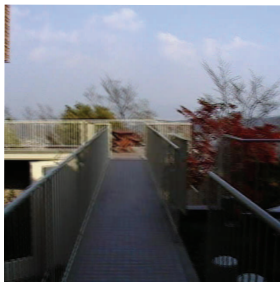
集会場と吹き抜け

4. 無千年王国説とユダヤ人伝道の神学的位置づけ

神戸改革派神学校: 市川康則

私の今の計画としては以下のとおりです。

1) 「ア」ミレ」の真義について——黙示録解釈と「千年支配」(20章)の意味、2) 「全イスラエルが救われる」(ロマ11:25)とは、3) 神の契約の真実(信実)性・一貫性——イスラエル・キリスト・教会、4) 教会の唯一性・公同性とイスラエルの躰き、5) 教会の「負債」としてのイスラエル宣教、6) 実際の諸問題



美しい空中回廊

そうでなければ/それとともに、準備委員の方からお願いする際に、かなりよく説明することで、全体の焦点が定まった討議ができると思います。

私の感じでは、終末論の立場の違いに焦点が行くよりも、それらの違いはあってもユダヤ人宣教が今の時代にどのような重大な意味を持つのか、ということが多角的に把握されるような会になれば、新しい発見の連続のような刺激に満ちたものになれば、と思います。宣教学会、聖書学会などにはできない、福音主義神学会ならではの討論ができればと願っているわけです。

ローザンヌの資料のことですが、邦訳はほぼ完成していますが、まだ私も原稿を手に入れています。Http://www.lausanne.org から入ればLOPsのpdfの形式でのダウンロードが可能です。

パネル・ディスカッション

神戸ルーテル神学校: 正木牧人

さて、午後のパネルの件ですが、午前の4名の発表者の先生方に加えて、準会員の他の神学校の先生方にも前に一緒にすわっていただいて、しばらくまずClarificationの質疑応答をしたいと思います。

さらに、午前の発題で見えてくるいくつかのポイントをとりあげて、同じ質問を全員になげかけるようなことはどうか、と考えています。そして、フロアからの質問を受け付けますが、時間の関係もありひとつ

ひとつ受けないで、次々に質問のみを受けていき、ころあいをみて質問をいくつかのカテゴリーにまとめて、一括してパネラーに答えていただく、という形はどうか、と思っています。パネラーが多くなるので心配されるのは焦点がぼけることですね。これは避けたい。そのためには、午前の発題の先生方から、メモ的なものであっても発題の内容の紹介が事前に必要ではないか、と思われます。それを事前で読んでいただくことでパネラー間にただようかもしれない場当たりの雰囲気回避することができます。

今回は、かなり難しいテーマでもありますが、参加される方にできるだけ全体の情報を提供させていただき、そのことにより建設的な研究会議となることを目指しています。ただ、発題してくださる先生方のアウトラインは暫定的なもので、準備経過の中で多少の変更もあることをご了解ください。



窓からの風景



日本福音主義神学会 西部部会
春の研究会議・総会のご案内

Mission & Theology : Jewish Evangelism

1. 日時 : 2006年 4月24日 (月) 10:00am－4:30pm
2. 場所 : 関西聖書学院 (KANSAI BIBLE INSTITUTE)
〒630-0266 奈良県生駒市門前町 22-1 【TEL.0743-70-8600】
3. 主題 : 宣教と神学 : ユダヤ人伝道の神学的位置づけ

今回は奈良に移転しました「関西聖書学院」の新校舎で開催されることとなりました。MTCのコースを持ち、宣教に深い関心を寄せるこの神学校で歴史を通じて“ホット”なテーマである「ユダヤ人伝道」を、神学会を構成している特色のある幾つかの神学校から「終末論－千年王国説－ユダヤ人伝道の位置づけ」の神学的視点を紹介しあい建設的な対話と議論を通じて会員相互の理解を深めることができたらと考えています。

4. プログラム (敬称略)

10:00 受付: (10:00-10:30 理事会)

10:30- 10:40 開会礼拝: 賛美・祈り (福田充男)・歓迎の言葉 (大田裕作)

10:40- 10:50 研究会議導入・午前の集会進行 (福田充男)

【 発題 】

10:50-11:15 『歴史的な千年王国説とユダヤ人伝道の神学的位置づけ』 安黒 務

11:15-11:40 『漸進的ディスペンセーション主義の千年王国説と

ユダヤ人伝道の神学的位置づけ』 眞鍋 孝

休憩 10分

11:50-12:15 『後千年王国説とユダヤ人伝道の神学的位置づけ』 瀧浦 滋

12:15-12:40 『無千年王国説とユダヤ人伝道の神学的位置づけ』 市川康則

12:40- 1:30 昼食 1:30-2:00 総会


2:00- 4:00 【 パネル・ディスカッションと質疑応答 】: 司会 正木牧人

主題 —ユダヤ人伝道の神学的位置づけ—

パネラー: 研究発表者と他の神学校の組織神学教師も加えて

4:00-4:30 閉会礼拝: 全体の総括・賛美・献金・祈り: (鷹取裕成)


(コーディネーター: 眞鍋、福田、正木、安黒)

- 1  ジョージ・E. ラッドの

歴史的千年王国説

とユダヤ人伝道の神学的位置づけ

一宮基督教研究所
安黒 務
<http://www.aguro.jp/>
<http://icici.intranets.co.jp/>
aguro@mth.biglobe.ne.jp

- 2  歴史的千年王国説と
ユダヤ人伝道の神学的位置づけ

■ 序

1. 預言的聖書箇所解釈の原則の検討
2. イスラエル民族の神学的位置づけ
3. 神の国の概念と千年王国

■ 結び


- 3  ●序：私自身の系譜①救い

■ 関西学院大学時代：雑多な救いの背景


1. 接点：映画・特撮集『ここに愛がある』本田弘慈先生（ホーリネス派）
2. 導き：KGK（キリスト者学生会）キャンパー片岡主事（ルーテル派）、真鍋夫人（メノナイト・ブレザレン）
3. 所属：スウェーデン・バプテスト系諸教会をベースにするオレブロ・ミッショナー日本福音教会（Japan Evangelical Churches）（カリスマ派）
4. 養い・交わり：山中良知先生研究室（改革派）

- 4  序：私自身の系譜②霊的養い・神学教育

1. KGKにおける超教派の交わり：超教派的思考を身につける
 1. 関西学院大学の聖書研究会ボプラ、KGK春季学校・夏季キャンプ
2. 関西学院大学経済学部：宗教社会学的思考を学ぶ
 1. 御言葉による直観的召命観ではなく、天職を求めての葛藤—天川潤二郎ゼミ—卒業テーマ『天職意識の喪失過程—英国の産業革命前後の経済における宗教的基盤についての研究—』
3. 関西聖書学院
 1. 三年コース卒業：キリストを愛し、聖書を愛することを学ぶ
4. 神戸改革派神学校
 1. 部分聴講：キリスト教哲学を学ぶ
5. フラー神学校宣教学部
 1. 世界宣教の大切さを学ぶ—グローバル・エデュケーション・プログラム
6. 東京基督教大学の共立研究所（卒業）、東京基督神学校（聴講）：
 1. 宇田進師に師事し、宣教学の最先端の学びと福音主義神学のエッセンスを徹底的に身につける—三年間で、共立と東京基督神学校のほとんどの科目を、聖書神学・歴史神学・組織神学部門を徹底的に学ぶ

- 5  序：私自身の系譜③神学研究

1. 初期の学びの助けになったもの—救済論中心
 1. 聖書：ハーレイ著『聖書ハンドブック』
 2. 義認と聖化：ウォッチマン・ニー著『キリスト者の標準』
 3. 聖霊の満たし：R.H.カルベツパー著『カリスマ運動を考える』
 1. ヘンドリクス・ベルコフ著『聖霊の教理』
 2. J.D.G.ダン著『イエスと御霊』
 3. J.V.テイラー著『仲介者なる神』
2. 現在の取り組み—包括的な神学の研究
 1. 歴史神学：宇田進著『福音主義キリスト教と福音派』、『総説現代福音主義神学』、他
 2. 組織神学：M.J.エリクソン著『キリスト教神学』、他
 3. 聖書神学：G.E.ラッド著『新約聖書神学』、『新約聖書批評学』、他

- 6  序：今回の発表の輪郭①

1. 福音主義神学陣営の一員として
 1. 宇田進著『福音主義キリスト教と福音派』、『総説現代福音主義神学』
2. スウェーデン・バプテスト系の伝統の中に生きる者として
 1. M.J.エリクソン著『キリスト教神学』
3. エリクソン著『キリスト教神学』の終末論理解の文献資料源は何か？
 1. G.E.ラッド著作集をベースにしている

4. ラッドの著作集は、どのような神学書をベースにしているのか？
 1. 厳密な聖書解釈において貢献してきた
 1. ゲルハルド・ヴォース著『聖書神学』、『パウロの終末論』
 2. ジョン・マレー著『ローマの信徒への手紙』

7 序：今回の発表の輪郭②

1. 「デイスペンセーションな前千年王国説」の影響の
強い背景の中にあるバプテストの流れの中にいたエリクソンやラッドが、
2. 「後千年王国説」「無千年王国説」の背景をもつ、
ヴォースやマレーの聖書解釈の適切性を認識し、
3. 「デイスペンセーション主義の影響」の課題を克服しつつ、
教会の歴史の最初の時期の認識であり、継承されてきた
4. “歴史的” 前千年王国説として再提起している。
ヴォースやマレーの厳密で正確な聖書解釈においては、
5. 福音派全体としての “共通項” を
確認できるのではないか。
その “共通項” に立ちつつ、多様な千年王国説が形成されていく
6. プロセスを丁寧に検証することが大切である。

8 序：今回の発表の輪郭③

1. G.E.ラッド著作集の中で、今回のテーマを分かりやすく、扱っている文献は何か？
2. “The Last Things” George Eldon Ladd
 1. How to Interpret the Prophetic Scriptures (1章)
 2. What About Israel ? (2章)
 3. The Kingdom of God (9章)

9 1. 預言的聖書箇所は どのように解釈すべきなのか？

1. 共通する聖書観—方法論の問題
2. 全聖書はひとつの結論を導き出すのか
3. 二つの異なった主題
 1. 旧約—イスラエル民族
 2. 新約—キリスト教会
4. 二つの異なった回答
 1. デイスペンセーション主義
 2. 啓示の漸進性を認識する立場 (G.ヴォース、G.E.ラッド)
5. 三つのメシヤ的人物像
 1. ダビデのような王：イザヤ11章
 2. 神とともに天の御座に：ダニエル書7章
 3. 苦難のしもべ：イザヤ53章
6. 基本的な聖書解釈方法
 1. イエスの人格・使命の視点において旧約聖書の預言を再解釈
 2. キリスト論であれ、終末論であれ—教理における最終的な言葉は新約聖書の中に

10 【挿入】聖書ハンドブックより


旧約聖書における三大思想の発展の段階


1. メシヤの国民：アブラハムへの祝福の約束
 - ヘブル民族は、この民族を通して全世界が祝福されるために創始されたものである。
2. メシヤの家族：ダビデへの約束
 - ヘブル民族が世界を祝福する方法は、ダビデの家の者によってである。
3. メシヤ：イエスの誕生
 - ダビデ家の者が世界を祝福する道は、その家の者（家系）のうちに生れるひとりの偉大な王によってである。


11 2. イスラエル民族の神学的位置づけ


①聖書解釈の原則


1. 旧約聖書は、イエス・キリストにおいて与えられた新しい啓示の視点で解釈
 1. 新約聖書がイスラエルについて教えているものは何か？
 2. 旧約聖書は、イスラエルの未来における救いを望み見ている
2. 新約聖書は、教会において霊的に成就されるべきであると、それらの預言を再解釈しているのか？
 1. 教会は新しい、真のイスラエルなのか？
 2. あるいは、神は依然として、彼の民イスラエルのための未来をもっておられるのか？

- 12  2. イスラエル民族の神学的位置づけ
- ②ローマ書9-11章の教えの検討(a)
1. 記述の動機: パウロの心の痛み(9:2)
 2. 最初のポイント
 1. 「イスラエル」、真の霊的イスラエル、神の民はアブラハムの血縁的子孫と同一ではない。(9:6,7)
 2. 神は、イサクを選び、イシュマエルを斥けられた。(9:8)
 3. この原則はローマ書の最初にも記述(2:28,29)
 4. この原則ーパウロが創始したものではない。
 1. 旧約にすでにあった。(エレミヤ4:4)
 2. ヨハネの記述(黙示録2:9,3:9)

- 13  2. イスラエル民族の神学的位置づけ
- ②ローマ書9-11章の教えの検討(b)
1. パウロの思想
 2. 第一義的に、贖罪の歴史において、
 1. アブラハムに与えられた約束の
 2. 相続人やヤコブの神の主権的選び
 3. イスラエルの不信仰
 1. ホセア書ー「姦淫の女をめとれ」ーイスラエルの霊的状态の象徴
 4. イスラエルに対する神の拒絶
 1. 最終的でも、回復できないものでもない
 2. 未来におけるイスラエルの救いへの言及

- 14  2. イスラエル民族の神学的位置づけ
- ②ローマ書9-11章の教えの検討(c)
1. 神は、彼の民を保護されてきた。(11:16)
 1. すべてのイスラエルが依然として救われるべきである。
 2. イスラエルの救いは、
 1. モーゼのいけにえの体系の再興と、ともに再建されたユダヤ人の神殿によるのではなく
 2. 教会とともにすでに確立されたキリストの血においてなされた新しい契約を通してでなければならない。
 3. イスラエルは、「預言についての時刻表」ではない。
 1. イスラエルのパレスチナへの帰還は、おそらく、イスラエルに対する神の計画の一部分ではある。
 2. しかし、新約聖書はこの問題について明らかに語っていない。
 3. しかしながら、世紀を通じての民としてのイスラエルの保護は、神の民イスラエルはしりぞけられていないというひとつのしるしである。

- 15  2. イスラエル民族の神学的位置づけ
- ②ローマ書9-11章の教えの検討(d)
- ジョン・マレーの解釈
1. 一部のイスラエル人が頑なになったのは、異邦人全体が救いに達するまでである。
 1. 頑なになったのは、一部の者であって、全体ではない。
 2. 一時的であって、最終的にはない。
 2. 頑なになることに終わりがくる。
 1. 文脈的考察ー「選ばれた者の総数」との解釈を妨げている。
 2. イスラエルの「皆」fullnessは、イスラエルの選ばれた者の皆ではありえない。
 3. 民族としてのイスラエル人の大部分の救いがある。
 1. この「皆の救い」は、イスラエルの罪と失敗に対象されているので、
 2. 「全体としてのイスラエル」の信仰と悔い改めへの回復のこと。
 3. もはや残された者が救われる時ではなく、「イスラエルの大部分の者」が救われる状況を心に描いている。
 4. 「イスラエルの皆の救い」は、異邦人に非常に大きい祝福をもたらす。
 5. 民族としてのイスラエル人の救いにおいて、「キリストを信じる信仰」以外の特権や身分の暗示は見られない。

- 16  3. 神の国
1. 「神の国」ーイエスの教えにおける中心主題
 1. 「神の国」の二重性: 現在性と未来性
 2. 贖罪の歴史ー「主の日」によって二つの時代に分けられる
 2. パウロキリストの勝利的支配について
 - 15:23 しかし、おのおのにその順番があります。
 - まず初穂であるキリスト、
 - 次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。
 - 15:24 それから終わりが来ます。

17 

3. 神の国

1. 贖罪の歴史の目標・ゴール: 神の国
 1. 神の国の「終末論的側面」
 2. いつ、どのようなかたちで「神の国」は来るのか？
2. 「主の日」についての見方
 1. 単一の複合的な出来事: 遠方の山のように
 2. 主の日、人の子の来臨、死者の復活、最後の審判: ひとつの山なみとして

18 

3. 神の国: 「千年王国」についての神学

1. 後千年王国説:
 - 勝利的宣教、キリストの霊的支配による変革、楽観的見方
2. 無千年王国説:
 - 文字通りの千年王国はない、霊的に解釈、悲観的見方
3. 前千年王国説
 1. ディスペンセーション的な前千年王国説
 2. 歴史的な前千年王国説
 1. ディスペンセーション的な立場がもつ課題への取り組み
 2. 後千年王国説・無千年王国説のすぐれた点も包括

19 

3. 神の国

1. ヨハネの黙示録において
 1. この時間的枠組み—修正されている。
 2. キリストの再臨における単一の出来事において生起するキリストの勝利→サタンに対する勝利は二段階で起こる(黙示録20章)
2. 第一の復活(20:4,5):
 1. サタンの投獄は一千年間続く(20:2,3)、
 2. 殉教者は、一千年間の最初に復活し、キリストとともに支配する。
3. 第二の復活(20:5):
 1. 死者の残りの者は、一千年の終わりに復活し、
 2. 火の池に投げ込まれる(20:10)。

20 

3. 神の国

1. 来るべき時代が開始される前に、
 1. 一千年間、歴史の中で、地上におけるキリストの支配が予想されている。
2. 千年期前再臨説—最も自然な解釈、
 1. キリストの一千年間の支配を教えている唯一の箇所、butこのことは反対の論拠にはならない
 2. 旧約聖書の預言者
 1. 教会の時代を予想していなかった。
 2. 主の日とそこでのイスラエルの役割の視点において、その未来と一緒に見ていた。
 3. 遠くの山々を眺望—ひとつの山と見えるが、山と山の間には谷がある

21 

3. 神の国: ディスペンセーション的な前千年王国説の特徴①

千年王国の時期の理解

1. 第一義的にユダヤ人のためのもの
 1. イスラエルの国土の回復
 2. 神殿の再建
 3. 旧約聖書時代のいけにえの体系の再設立
 4. 民族としてのイスラエルについての旧約聖書預言のすべては、文字通り成就する
2. 神は、二つの異なったプログラムと異なった祝福をもつ、イスラエルと教会という二つの別個の、分けられた人々をもっておられる。
 1. イスラエルに対する神のプログラムは、神政国家であり、地上にあるものである。
 2. 教会に対する神の目的は、普遍的で霊的なものである。

22 

3. 神の国: ディスペンセーション的な前千年王国説への反論①

イスラエルの未来について議論されている二つの書簡

1. **ヘブル8章**
 1. **型と影の時代**
 1. 旧約の礼拝組織－礼拝において描かれていた実体がキリストにおいてもたらされたときから、廃止された。
2. **ローマ11章**
 1. **教会＝霊的イスラエル**
 1. 文字上のイスラエルは、まだ再びオリーブの木に接木されうる。そして真のイスラエルに含まれる。
 2. それゆえ、第一義的にユダヤの特徴をもつものとして、千年王国をみることは不可能である。

23 3. 神の国－キリストにおける神の贖罪的支配はどこで始められるのか？

1. **キリストの復活－それ自身終末的事件**
 1. 死者からの初穂－終わりの日の始まり
2. **神の国の現在性**
 1. 実現された終末論
 2. 終わりの日の出来事の断片－歴史の只中に植えつけられた

24 3. 神の国－「終わりの日」について

1. 聖書－「終わりの日」としてこの時代について語っている。
 1. 2:17『神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。
 2. ペンテコステの日に、御霊を注がれたとき
 3. ペテロ－御霊の賜物についてのメシヤの預言を引用（使徒2:17）
2. 旧約聖書において－「終わりの日」は
 1. 歴史の終わりの神の終末における王国の時代＝メシヤの時代（イザ2:2、ホセア3:5、エレ23:20）
3. ペテロ－「終わりの日」を歴史の中に
 1. 「主の日」は－まだ未来にある。（使徒2:20）
 2. 「主の日」は－「終わりの日」によって先行されている。

25 3. 神の国－「終わりの日」の二重性

1. 聖書－「終わりの日」としてこの時代について語っている。
 1. ヘブル1:2 この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。
 2. 多くの福音主義の神学者－「終わりの日」－終末直前の最後の時代として
2. 新約聖書－イエスとペンテコステによって導入された新しい時代として引用
 1. クリスチャン－ふたつの時代に生かされている
 2. クリスチャン
 1. すでに来るべきいのちと力を経験しているゆえに
 2. 来るべき時代を相続するように運命づけられている

26 3. 神の国：千年王国説の議論の解決

1. **それぞれの説**
 1. 一長一短であり、疑問の余地のない見方なし
 2. このような場合－より困難の少ない見方を見出す努力をすべき
2. **後千年王国説**
 1. 福音宣教における楽観主義 vs 信仰がさめるとの記述
 2. キリストの肉体的存在なしの地上支配の描写なし
3. **無千年王国説**
 1. 前千年王国説の概念－単一の聖書箇所（に）依拠と批判
 2. 教理－単一の聖書箇所（に）依拠すべきものでない
4. **歴史的な前千年王国説**
 1. ひとつの見方が、もう一つの見方ができるよりも、さらに良いかたちで特別な箇所を説明できる
 2. 熟20章の「二つの復活」に対する無千年王国説の説明の困難さ－聖書解釈の原則をまげることになる
 3. 単一の聖書箇所（に）依拠するものではなく、それを暗示している多くの聖書箇所あり（1コリ15:22-24、ルカ14:14;20:35、1コリ15:23、ピリピ3:11、1テサ4:16）
 4. 二段階の復活（ダニエル12:2、ヨハネ5:29）
5. **関連する聖書箇所への「適合性」の観点から－前千年王国説がより自然な解釈**

27 ●結論

28 関連サイト

- <http://www.aguro.jp/>
 - 一宮基督教研究所サーバー：
 - 約30年間の安黒務の小さな研究の積み重ねを掲載。
- <http://icici.intranets.co.jp/>
 - 一宮基督教研究所イントラネット：
 - 今回の研究会のパネル・ディスカッションの継続的展開の場を模索して、再開させていただいたネット上にあるグループ・ソフトウェア
 - 参加希望者は、下記の安黒のメール・アドレスに「ICIイントラネットへの登録案内状を送ってください。」とメールください。（無料）
 - aguro@nth.biglobe.ne.jp

「漸進的ディスペンセーション主義の前千年王国説と
ユダヤ人伝道の神学的位置づけ」

序

限られた短い 25 分間の発題時間を有効に用いるために、私の終末論構築に直接貢献した資料はこの論文の最後のところにまとめて掲載している。特に必要としない限り、資料についての説明はしない。

私が示されてきている立場の提示に入る前に、福音主義終末論者が共通理解している事柄を以下のポイントで確認したい。

(1) 聖書論での一致

旧・新訳聖書をプロテスタント聖書解釈原理である字義的、文化的、批評的(バーナード・ラム)「聖書解釈学概論」で用いられている用語)方法によって解釈して出てくる真理命題のみを用いて終末論を構築する。

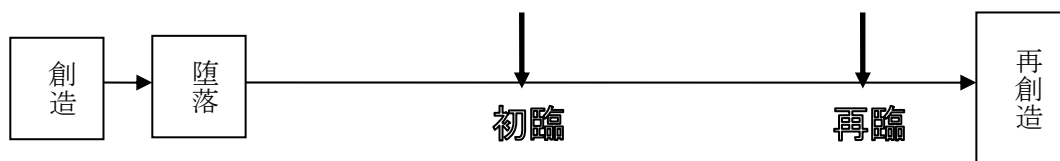
(2) 聖書啓示の中心に関する一致

聖書では、墮落した人間のメシヤ(イエス・キリスト)による救済(回復)が中心メッセージとなっており、メシヤが聖書啓示の中核的対象である。もちろん、回復は人間に限定されないで、創造されたもの全てを含む。

(3) メシヤの 2 度にわたる歴史介入に関する一致

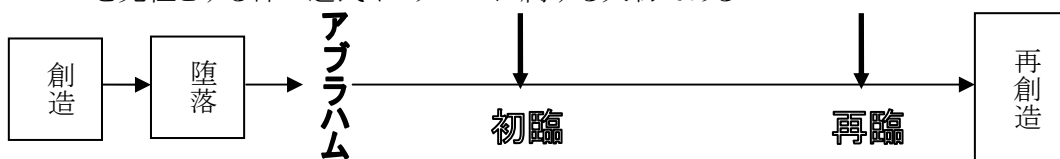
神の人類救済の基本的手段は、2 度にわたるメシヤの歴史介入(キリストの初臨と再臨)である(ヘブル 9:26～28 を参照)。

「キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられましたが、二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。」(9:28)



(4) メシヤがイスラエル人(ユダヤ人)であることに関する一致

2 度にわたる歴史介入をするメシヤは、イエスというユダヤ人としての名を持ち、アブラハムを先祖とする神の選民イスラエルに属する人物である



(5) 神の選民イスラエルの救済史の中における役割については、福音主義神学者間にまだ十分な一致点が与えられていない。

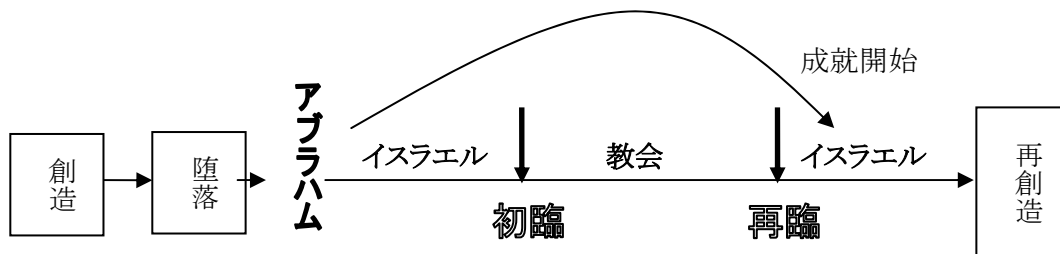
特にキリスト初臨以後のイスラエル民族の役割については、今の新約教会が「真のイスラエル」であると理解して民族イスラエルの聖書啓示に基づく定められた役割を否定する立場(置換神学)と、新天・新地が再創造されるまではイスラエル民族の聖書啓示に基づく歴史上の定められた役割が存在するとする立場(非置換神学)が福音主義陣営内にある。

I 漸進的ディスペンセーション神学

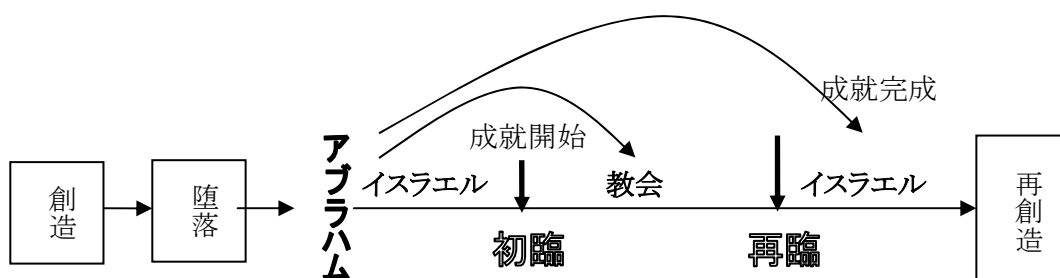
「漸進的ディスペンセーション神学」(Progressive Dispensationalism)は、従来のディスペンセーション神学の特徴である救済史におけるイスラエルと教会の厳密な区分化を緩め、旧約に記されているイスラエル民族に啓示された神の契約(ノア、アブラハム、モーセ、ダビデ、諸預言者の啓示)は、新約の教会において成就が開始したと出張する。(この点の詳細は、Blaising & Bochの”Progressive Dispensationalism”を参照するように。)

この立場は、従来のディスペンセーション神学の特徴の一つである「挿入された新約教会」に見られる旧約時代と新約時代の非連続的なかわりを脱し、新約教会はメシヤに関する旧約預言(ダビデ契約も含めて)の部分的成就であるとし、旧約時代と新約教会時代の明確な連続性を主張する。この論点は、以下の図表によっても示されている。

<従来のディスペンセーション神学>



<漸進的ディスペンセーション神学>



結論として、「漸進的ディスペンセーション神学」はこの立場に立つ神学者に次の2点の神学的再吟味の道を開いた：

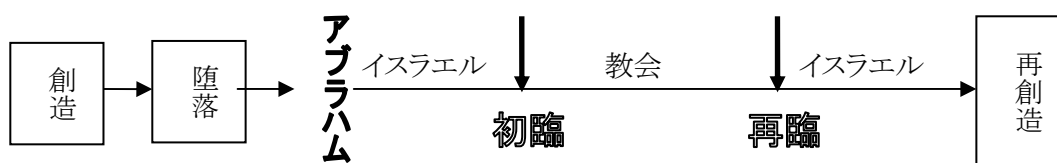
- (1) 「イスラエル」 vs. 「教会」という従来のディスペンセーション神学の区別を再吟味する。
- (2) 旧約の諸契約とその成就の開始であるメシヤの初臨、またその成就の完成をもたらすメシヤの再臨を聖書全体の視点から見直す。

Ⅱ 漸進的ディスペンセーション神学における研鑽が示すもの(眞鍋の提言)

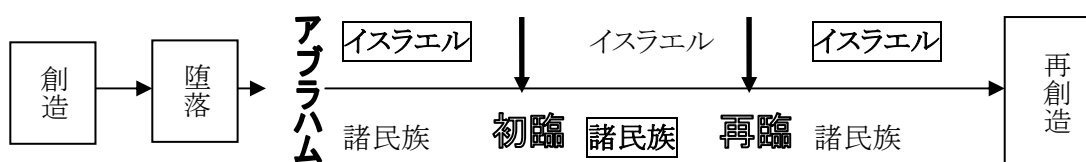
多くの漸進的ディスペンセーション神学者による研鑽が、従来の立場にある学者の反論の中で続いている。私自身の過去30年以上の研鑽の結論として次の2点を紹介する：

- (1) 従来のディスペンセーション神学の救済史における「イスラエル」 vs. 「教会」の区別ではなく、救済史全体にわたって「イスラエル民族」 vs. 「諸民族」の区別が聖書的な区別である。

<従来のディスペンセーション神学>



<漸進的ディスペンセーション神学>



- (2) 従来のディスペンセーション神学の「患難期前キリスト空中再臨説」ではなく、「患難期後キリスト再臨説」が聖書全体の啓示事実から出張される。「神の人類救済史の図表」を参照のこと。

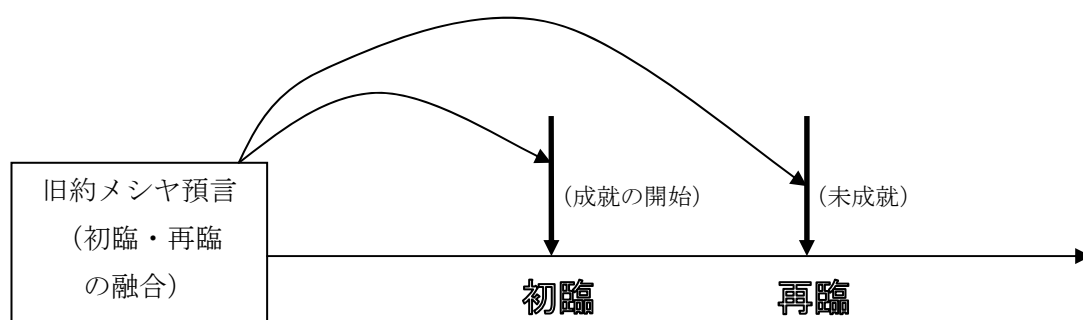
Ⅲ 福音主義終末論の一致へ向かう「旧約メシヤ預言」解釈のあり方

福音主義神学の終末論が一致していない最大の要因は、旧約聖書のメシヤ預言解釈において、理解の相違が存在していることである。例えば、イザヤ11:6～9は、キリスト初臨に基づく救いに与っている者の霊的状态を表していると比喩的に解釈するのか、あるいは、キリスト再臨によってもたらされるキリストが支配する王国での具体的状況が描かれていると文字通り解

釈すべきなのか、の理解の相違がある。エゼキエル 40～48 章のエゼキエルが記したものについても同じような2通りの解釈の可能性が存在するのである。

この問題提起に対して、私はとても有効な一つの解決策を提案したい。それは、旧約メシヤ預言の特徴であるキリストの初臨預言と再臨預言の融合している状況を利用するという方法論である。新約聖書記者は、キリスト初臨とそれがもたらした霊的祝福を旧約預言の成就としてい

る。言い換えれば、下の図にあるように、新約聖書記者は、キリスト初臨に関わる歴史的事実を旧約預言の成就として、それと対応する旧約聖書預言部分を引用しているのである。このことは、新約聖書記者の旧約理解(解釈)がどのようなものであったのか(比喩的に解釈しているのか、あるいは、字義的に解釈しているのか、など)を、明らかにする道を開く。



ここで、一つの具体的な方法論を提案したい：

- ①新約聖書記者が聖霊に導かれて旧約聖書を引用して、それがキリストの初臨で成就していると主張しているところに目を留める。
- ②①の作業を通して、多くの旧約聖書箇所が指摘されるが、それらの旧約聖書箇所の前後の文脈をしっかり研究する。
- ③②の研究の結果として、キリスト再臨によってもたらされる状況が預言されている部分がそれらのキリスト初臨預言文脈の流れの中(1, 2 節から1 章にわたる範囲内)に出てきているかどうか調べる。
- ④③に該当する箇所は、キリスト初臨とキリスト再臨に関わる両方の預言が纏まって出ていると考えることが出来る。そこで、キリスト初臨預言部分と、それが成就していると主張され引用されている新約聖書の対応部分を比較検討すれば、新約聖書記者がその旧約預言をどのように解釈したかが明らかになる。すなわち、新約聖書記者の旧約預言解釈原理がみえてくるのである。その解釈原理でもう一方のキリスト再臨預言箇所をも解釈すべきであると結論できる。新約聖書記者は、聖霊に導かれて旧約聖書を正しく解釈して引用しているからである。
- ⑤④で出てきた解釈手法が、基本的に旧約キリスト初臨、再臨預言箇所の解釈に用いられるべきである。靈感された新約記者の旧約解釈の方式に基づくからである。一般的にいて、預言箇所は無理な比喩的解釈を避け、言語表現が指示している通常の意味を得るために字義的に解釈すべきである。

具体的な代表例を挙げる(新改訳、下線部は発題者が施した):

例1. ゼカリヤ 9:9, 10 (9節は新約のマタイ21:5; ヨハネ12:15で引用)

9節: シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜わり、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに。

10節: わたしは戦車をエフライムから、軍馬をエルサレムから絶やす。戦いの弓も断たれる。この方は諸国の民に平和を告げ、その支配は海から海へ、大川から地の果てに至る。

例2. イザヤ 49:6 (後半は使徒 13:47 の引用されている)

6節: 主は仰せられる。「ただ、あなたがわたしのしもべとなって、ヤコブの諸部族を立たせ、イスラエルのとどめられている者たちを帰らせるだけではない。わたしはあなたを諸国の民の光とし、地の果てにまでわたしの救いをもたらす者とする。」

これらの箇所以外にも、私の研究では、25以上の同じような旧約聖書箇所がある。

この旧約聖書解釈の原理を適用して旧約メシヤ預言箇所を解釈して図表化したのが、最後のページにある 神の人類救済史の図表 である。

結論

結論として、今の時代における「ユダヤ人伝道」のあり方を漸進的ディスペンセーション主義の神学の枠組みの中に位置づけると以下ようになる:

- (1) 救済史の中においては、神の選民ユダヤ人は永遠の御国に入れられるまで、旧約諸契約、特に「アブラハム契約」に基づく地上での役割がある。ユダヤ人は、神の摂理的な導きによって約束の地への民族的復帰をなし、メシヤであるイエス・キリストを信じる信仰に基づく豊かな霊的祝福を受けることになる。
- (2) このためにも、既に信仰に入れられている諸民族クリスチャン、ユダヤ人クリスチャンはキリストの宣教命令に従ってユダヤ人の救いの完成のために私たちの宣教の任務を果たしていくべきである。もちろん、他の民族への宣教も同じように続けていくべきである。
- (3) ユダヤ人宣教は、救済史における最後の部分の宣教の働きとして神が摂理的に定めておられるので、世界中のキリスト宣教のわぎは、世界を支配する最後の反キリストの出現による妨害の中にありながらも、ユダヤ人宣教へと集約されていくことになるであろう。

参考文献

(英文資料)

Louis Berkhof. *Systematic Theology*, London: The Banner of Truth Trust, 1966.

Craig A. Blaising and Darrell L. Bock. *Progressive Dispensationalism*, Wheaton, Illinois: Bridgepoint, Victor Books, 1993.

Craig A. Blaising and Darrell L. Bock, eds. *Dispensationalism, Israel and the Church*, Grand Rapids, Michigan: Zondervan, 1992.

J. Oliver Buswell. *A Systematic Theology of the Christian Religion*, Grand Rapids, Michigan: Zondervan, 1962.

Donald K. Campbell and Jeffrey L. Townsend, eds. *The Coming Millennial Kingdom-A Case for Premillennial Interpretation*, Grand Rapids, Michigan: Kregel Publications, 1997.

Lewis Sperry Chafer. *Systematic Theology*, Dallas, Texas: Dallas Seminary Press, 1947.

Millard J. Erickson. *Christian Theology-Second Edition-*, Grand Rapids, Michigan: Baker Books, 2001

David E. Holwerda. *Jesus & Israel- One Covenant or Two?* Grand Rapids, Michigan: Eerdmans Publishing Company, 1995.

Walter C. Kaiser, Jr. *The Use of the Old Testament in the New*, Chicago: Moody Press, 1985.

George Elden Ladd. *The Gospel of the Kingdom*, Grand Rapids, Michigan: Eerdmans Publishing Company, 1959.

Takashi Manabe. *A Speech Act Theory Based Interpretation Model For Written Texts*, Ann Arbor, Michigan: University Microfilms International, 1992.

Charles C. Ryrie. *Dispensationalism*, Chicago: Moody Press, 1995.

Charles C. Ryrie. *Dispensationalism Today*, Chicago: Moody Press, 1966.

Robert L. Saucy. *The Case for Progressive Dispensationalism*, Grand Rapids, Michigan: Zondervan, 1993

Erich Sauer. *From Eternity to Eternity*, Grand Rapids, Michigan: Eerdmans Publishing Company, 1954.

John F. Walvoord, *Matthew- Thy Kingdom Come*. Chicago: Moody Press, 1974.

John F. Walvoord and Roy B. Zuck, eds. *The Bible Knowledge Commentary-New Testament Edition*, Wheaton, Illinois: Victor Books, 1983.

John F. Walvoord and Roy B. Zuck, eds. *The Bible Knowledge Commentary-Old Testament Edition*, Wheaton, Illinois: Victor Books, 1985.

(邦文資料)

いのちのことば社出版部 『新聖書注解』—旧約— (いのちのことば社、1975)

増田誉雄、村瀬俊夫、山口昇、編 『新聖書注解』—新約— (いのちのことば社、1973)

ミラード・J・エリックソン 『キリスト教神学』第1～4巻 (いのちのことば社、2003－2006)

エーリッヒ・ザウアー 『永遠から永遠まで』 (れいのかて社、みくに書店、1968)

ヘンリー・シーセン 『組織神学』 (聖書図書刊行会、1961)

H. ジェーコブズ 『キリスト教教義学』 (聖文舎、1970)

ルイス・スペリー・チェイファー 『聖書の主要教理』 (聖書図書刊行会、1985)

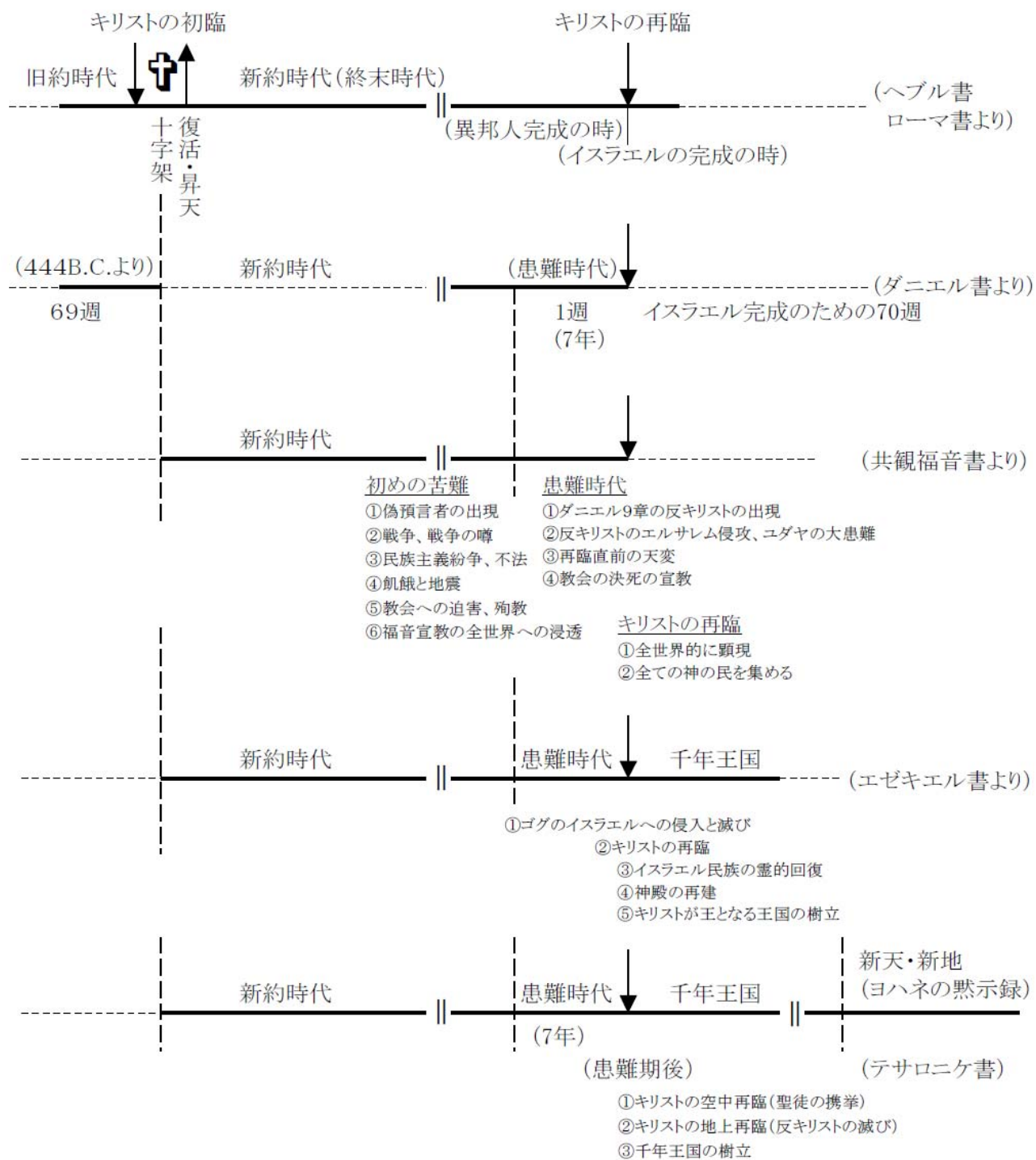
フランシス・デヴィッドソン他編 『聖書注解』 (キリスト者学生会、1966)

チャールズ・C・ライリー 『概説新約聖書の神学』 (聖書図書刊行会、1981)

R. ラドウィグソン 『終末に関する聖書の預言』 (聖書図書刊行会、1981)

バーナード・ラム 『聖書解釈学概論』 (聖書図書刊行会、1963)

神の人類救済史の図表



1) 聖書の契約的構造におけるユダヤ人の重要性

アブラハム契約第三点の「すべての民族の祝福」が原点 Gen. 12:3b

E. C. Copeland "Israel in the Purpose of God", D. McKay "Bond of Love", B. Backensto

2) 契約と王権における旧新約聖書の一貫性：契約期分割説。プレミレ・アミレ・ポストミレの問題。

同じ「今」をA-(天上)とPost-(地上)は言い、共に「千年」を象徴的にとる。

同じ「地上での祝福」をPre-も言うしPost-も言う。Puritanの中でも特にこの共通点が見られる。

詩篇や預言書に無数に、ダビデ契約が成就する契約と王権のGolden Ageの預言が見られる。

ex. Ps. 145:11f., Ez. 37:24f.

復活の主の大宣教命令は現在この世でキリストが王として支配していることを宣言。Mt. 28:18f.

AD150-250にChiliasmとしてPre-の類似が見られるのは、ユダヤ人キリスト者に発する。(A. A. Hodge)

Post-に対する悲観的現実からの批判は、ただ聖書を基準とする信仰に反する。

社会改良主義的との批判は、別物をさす。今日のPost-は必ずしもTheonomy (再建主義)とは限らない。

組織神学から：Berkhof, Reymond, Erickson, A. A. Hodge, A. H. Strong, Hendriksen, Boettner

Three Views on the Millenium and Beyond, Ralph Smith 「福音の勝利」

3) ヨハネの黙示録20：5の「生き返った」について (KikとChiltonが極めて的確と思う)

み言葉が明言しきっていないことを明言しすぎる危険の自覚を。

直前の文脈は、現在主の十字架と復活で悪魔が縛られ、聖徒が座に着いていることを表していること。

ザオー (生きる) であってエゲイローでないこと。Jo. 5:25 よみがえりの体は霊的であること。

エゼーサン (ザオーのアオリスト) の二回が違ったニュアンスであることは、統語論的には当然可能。

義人の復活と悪人の復活が離れることは他の聖書からは考えられないこと。A. H. Strong (cf. Erickson)

ヨハネ黙示録の注解：Hendriksen, J. Marcellus Kik, Tenny, Edman, L. Morris, D. Chilton, Buis
Four Views of the Book of Revelation

4) キリスト教会のユダヤ人伝道についての位置づけ：ピューリタン後の流れと、ポストミレの世界観

「イスラエルの救い」と「千年王国」の霊的現実性地上性との関係：ピューリタンでの系譜

Calvin:すでに御国はあり、歴史の中でさらに勝利する、との一般的理解

イスラエルの回心について：Luther, Calvin, Bucer, Peter Martyr, Beza, Geneva Bible

Westminster大教理他

John Henry Alsted (1627), Joseph Mede (1586-1638) の歴史観

千年王国説は関係なく終末のしるしとしてのユダヤ人伝道が強調されるようになる。(cf. John Owen)

そこから逆に、Post-的世界宣教観が生まれてくる。それはスコットランドなどで19世紀に花開く。

Iain Murray "Puritan Hope", 岩井淳「千年王国を夢見た革命」, Lausanne Jewish Paper

5) ローマ人への手紙11：26の「イスラエルは皆」について

11:11, 25, 23の文脈、特に11:25の異邦人のプレローマ (全体) と11:26のユダヤ人のパス (皆) cf. 9:6

終末というケーキの上のイチゴとしてのユダヤ人の回心。アブラハム契約第三点の成就の奥義

：終末の勝利のしるし。これは、土地としてのパレスチナではない。

John Murray "Romans", H. Bavinck "Our Reasonable Faith" (否定),

Tape: Bruce Waltke "The Doctrine of Land in NT Theology" at Geneva College Lecture

6) 福音主義運動の非聖書的なベシミズム (悲観主義) を克服すべきである

Richard Cameronの祈り(1680) Samuel Rutherford(1661)の言葉に見られるユダヤ人宣教にかけた

終末への熱望。イスラエルは「再び接木」される=キリストにあって!!

重要なことは、「キリストにあって」である。(cf. Dispensationalismのユダヤ人観)

ユダヤ人も異邦人もなくキリストにあってひとつであること。ユダヤ人は全体として、キリストにあって

救われ、異邦人と共にまことのイスラエルとなる。終末のしるし、アブラハム契約の成就である。

Eph. 2:15, 18, 3:6, Gal. 3:28, 1Cor. 12:13

C. H. Spurgeon "The Restoration and Conversion of the Jews", C. VanTil "Christ and the Jews"

千年王国説とユダヤ人伝道

—無千年王国説の立場から—

(日本福音主義神学会西部部会春季研究会議講演梗概)

2006年4月24日(月)

於 関西聖書学院

講師 市川康則

序言. 本講演の性格・制約

I. 「無」千年王国説の真義 — 黙示録解釈と「先年支配」(20章)の意味

A. 黙示録の構成と解釈法

1. 黙示録の漸進的並行法 (W・ヘンドリックセン)
2. 7部構成
 - a. 1 - 3章
 - b. 4 - 7章
 - c. 8 - 11章
 - d. 12 - 14章
 - e. 15 - 16章
 - f. 17 - 19章
 - g. 20 - 22章
3. 20:1-6とそこに記される「千年期間」との解釈の枠組み

B. 「無」千年王国説とは

1. 実現した千年王国 (J・E・アダムズ) としての無千年王国説
2. 第1の死と第1の復活
3. キリストと共なる支配

C. 無千年王国説の終末論の概略 (A・A・フックマ)

1. 開始された終末論 (inaugurated eschatology>realized eschatology)
 - a. キリストは罪と死とサタンに対する決定的な勝利を獲得された。
 - b. 神の国は現在の事態であると共に、将来の事態でもある。
 - c. 終わりの日々はなお将来であるが、しかし、我々は既に終わりの日々にいる。
 - d. 我々は今、黙示録20章の千年王国(千年支配)にある。
2. 将来の終末論 (future eschatology)
 - a. (終末の) “時のしるし” は現在にも将来にも関わる。
 - b. キリストの再臨は1回的な出来事である。
 - c. キリストの再臨時に、信者・未信者双方の全体的な復活が起こる。
 - d. 復活後、なお地上に生きている信者は直ちに栄光の状態に入れられる。
 - e. それから全信者の携挙が起こる。
 - f. それから最後の審判が起こる。

神による最終的、公的審判→救い（栄誉・報い）と滅び（恥辱）、神の栄光。

g. 審判後、究極的状态の開始。

3. 無千年王国説の諸側面

- a. 旧・新約を結ぶものは恵みの契約の唯一性（統一性・連続性）である。
- b. 神の国が人間の歴史の中心である。
- c. イエス・キリストは歴史の主である。
- d. 全歴史は宇宙のトータルな贖いという目標に向かって進んでいる。
- e. 無千年王国説の終末論は（決して勝利主義的ではないが）原理的に“樂觀的”である。

II. 「全イスラエルが救われる」（ロマ 11：25）とは

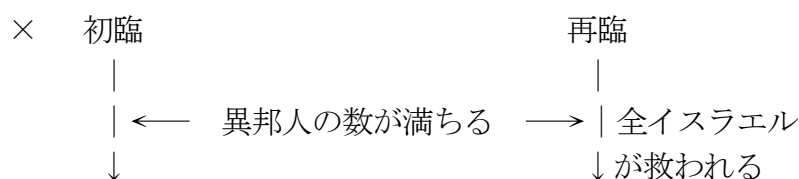
A. ロマ書における 9 - 11 章の意義

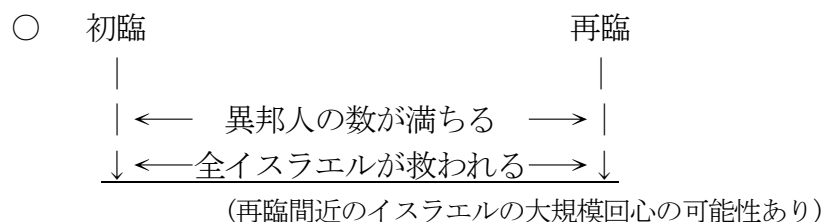
- 1. 8 章までと 9 - 11 章の関係
- 2. 9 - 11 章の意義
- 3. 9：1 - 5 の意義

B. 11 章 26 節の解釈

- 1. 解釈のタイプ
 - a. 終わりの時の、イスラエル民族の救い
 - b. 全時代を通じての、異邦人とユダヤ人の選ばれた者の全体の救い
 - c. 全時代を通じての、イスラエルの中の選ばれた者の全体
- 2. 解釈視点
 - a. すべての人間は（異邦人もユダヤ人も）罪人であり神の裁きにのみ値する。
 - b. キリストへの信仰によってのみ義とされ、ユダヤ人も例外ではない。
 - c. 神は恵みと裁きの両方において主権的である。
 - d. イスラエルの躓きは、神の一貫した計画の中で起きており、最終的ではない。
 - 1) イスラエルの躓きの責任は彼ら自身にある — 彼らの罪に対する神の裁きである。
 - 2) イスラエルの躓きは、異邦人への福音宣教のための、異邦人を神の民に加えるための神の方法であった。
 - 3) イスラエルの躓きは、異邦人の数が満ちるまでであり、その後彼らも神に帰ってくるためであった。
 - 4) 異邦人の数のまっとうもイスラエルの数のまっとうもこの新約時代—その過去・現在・未来—において起こっていることである。
 - e. 神の契約的一貫性・信実性（次章）

（下図：フッケマより）





Ⅲ. 神の契約の信実性・一貫性—イスラエル・キリスト・教会

A. 旧約イスラエルのモデル

1. 恵みの契約締結—アブラハム・モーセ・ダビデ
2. 王国の分裂と滅亡
3. 終末的回復の預言と予兆

B. 主イエス・キリストのモデル

1. 神の裁きとしてのキリストの十字架の死
2. 神による栄光化としてのキリストの復活
3. 旧約イスラエルの歴史を集約し総括するキリスト
4. 人の罪をご自身の義の啓示の機会とする神

C. 使徒パウロのモデルと彼の確信

1. 律法主義的救済努力において挫折したパウロ
2. 信仰によって救われたパウロ
3. キリスト者のモデルとしてのパウロ

Ⅳ. 教会の公同性とエキュメニズム、およびイスラエルの躰

A. 教会の公同性の必然性根拠

- 序. 教会の唯一性と公同性
2. 神の絶対性と選びの終末志向的性格
3. キリストにおける神の時の充満
5. エルサレム使徒会議の意義

B. 公同性の制約

1. 真理の告白において (略)
2. 「ユダヤ人問題」

C. 公同性とエキュメニズム

1. 教会の宣教使命とその協力—エキュメニズムの母胎
2. エキュメニカルな自覚における地域宣教—パウロにおけるその典型
3. 教会の公同性の現代的指標としてのエキュメニズム

Ⅴ. 教会の“負債”としてのイスラエル宣教

A. 使徒パウロの“救済史的”召命感

1. 「ユダヤ人をはじめ異邦人にも」
2. エルサレム教会支援に見られる召命理解—ユダヤ人宣教のモデル！？

B. ユダヤ人に対する宗教改革者の態度

1. ルター
2. カルヴァン

C. ユダヤ人宣教に関する現代の見解

1. R・ニーバー
2. P・ティリッヒ
3. J・モルトマン
4. 教會的文書
 - a. オランダ改革派教會
 - b. 第二ヴァティカン公会議
 - c. 世界教會協議會
 - d. ローザンヌ會議

VI. 實際的諸問題

- A. 「ユダヤ人」とは誰か
- B. イスラエルの国とはどこか
- C. 日本における實際的困難さ

結語.

日本福音主義神学会西部部会 春期研究会議

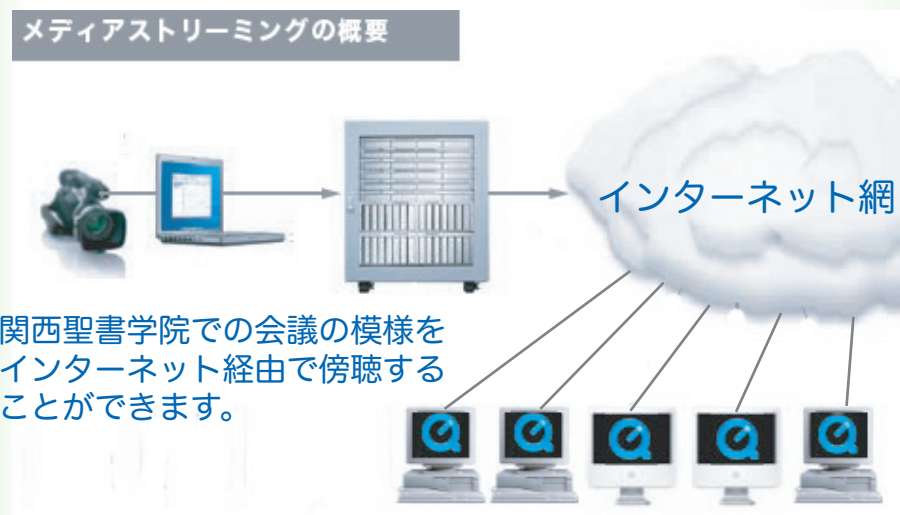
- インターネット中継による傍聴のご案内 -

主の御名を賛美いたします。来る4月24日(月)に催されます、春期研究会議の内容を、インターネットを利用して傍聴したり、後日あらためて視聴していただくことができるように準備を進めております。

1) インターネットで会議を傍聴

会議の内容をお手元のパソコン(※1)で傍聴することができます。
(ADSLまたは光ファイバによるインターネット接続環境が必要です。)
必要なプログラムの設定方法なども、下記の特設ページで閲覧可能です。
(※1: Windows XP または Mac OS X(10.2.8以降)が稼働しているパソコン。)

インターネット傍聴特設ページ
<http://r-c-i.net/tmp/20060424/>



2) 収録した動画をインターネットで視聴

後日、収録した会議の内容をインターネット上に掲載(※2)いたしますので、ご自由に視聴することができます。発表内容や質疑応答を繰り返し視聴していただく事が可能です。

(※2: 掲載する場所等は、後日改めて連絡させていただきます。)